

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	Association of structural social capital and selfreported well being among Japanese community dwelling adults: A longitudinal study
別タイトル	日本の地域住民における構造的ソーシャル・キャピタルと主観的ウェルビーイングの関連:縦断解析
作成者(著者)	能城, 一矢
公開者	東邦大学
発行日	2022.03.16
掲載情報	東邦大学大学院医学研究科 博士論文 内容の要旨及び審査結果の要旨.
資料種別	学位論文
内容記述	主査: 村上義孝 / タイトル: Association of structural social capital and selfreported well being among Japanese community dwelling adults: A longitudinal study / 著者: Kazuya Nogi, Haruhiko Imamura, Keiko Asakura, Yuji Nishiwaki / 掲載誌: International Journal of Environmental Research and Public Health / 巻号・発行年等: 18(16): 8284, 2021 /
著者版フラグ	none
報告番号	32661甲第1025号
学位記番号	甲第704号
学位授与年月日	2022.03.16
学位授与機関	東邦大学
DOI	10.3390/ijerph18168284
その他資源識別子	https://www.mdpi.com/1660_4601/18/16/8284
メタデータのURL	https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD56016135

博士學位論文

論文内容の要旨

および

論文審査の結果の要旨

東邦大学

能城一矢より学位申請のため提出した論文の要旨

学位番号甲第 704 号

学位申請者 : 能 城 一 矢

学位論文 : Association of structural social capital and self-reported well-being among Japanese community-dwelling adults: A longitudinal study

(日本の地域住民における構造的ソーシャル・キャピタルと主観的ウェルビーイングの関連：縦断解析)

著 者 : Kazuya Nogi, Haruhiko Imamura, Keiko Asakura, Yuji Nishiwaki

公表誌 : International Journal of Environmental Research and Public Health
18(16): 8284, 2021

論文内容の要旨 :

【背景と目的】

健康を構成する身体的・精神的・社会的ウェルビーイングは相互に影響を与えており、身体的のみならず精神的・社会的ウェルビーイングの探求も重要である。一方で、近年、ソーシャルキャピタル（人と人との繋がり：以下、SC）と健康の関連が注目されている。SCの構造的な側面（地域におけるネットワークや社会参加等）は、認知的な側面（一般的信頼や互酬性等）に比べ、介入が容易と思われる。そこで本研究は、構造的SCと主観的ウェルビーイングとの関連を検討した。

【方法】

本研究は、長野県小海町の40歳以上の住民を対象とした質問票調査を基にした縦断研究である。2015年のベースライン調査では、対象者3,112人のうち2,105人から回答が得られた（回収率67.6%）。このうち、代理者回答を除外し、主観的幸福感、主観的健康感、抑うつ傾向の3指標それぞれで評価したウェルビーイングがベースライン時に高値の者を分析対象とした（主観的幸福感:1,032人、主観的健康感:938人、抑うつ傾向:471人）。主観的幸福感および主観的健康感は、それぞれ該当する質問項目の回答を用いて評価し、先行研究に準じて高値を定義した。抑うつ傾向は、厚生労働省の高齢者基本チェックリストを用い65歳以上を評価した。全25項目のうち、抑うつ傾向に関する5項目を取り上げ、リスクが低いとされる1項目以下該当を高

値とした。3 指標それぞれについて、ウェルビーイングが 2019 年の追跡調査で低値に変化（低下）することをアウトカムとした。

地域生活における主要な構造的 SC として、地縁活動（町内会、子ども会、消防団など）への参加、および近所づきあいの人数の 2 指標を設定し、それぞれ個人レベル・地域レベルの変数を曝露因子とした。先行研究に準じて、地縁活動への参加は年数回以上/未満、近所づきあいの人数は概ね 5 人以上/未満を基準としてそれぞれ高/低に 2 区分した。地域レベルの変数は、地縁活動への参加は「年数回以上」、近所づきあいの人数は「5 人以上」の割合を町内 34 地区単位（ベースライン時）で算出し、割合の上位 17/下位 17 地区をそれぞれ高/低に分類した。

共変数は、婚姻状態・同居人の有無・教育歴・重篤疾患通院の有無・飲酒習慣・喫煙習慣とし、アウトカムの 3 指標毎に、居住地区を考慮したマルチレベル修正ポアソン分析を用いアウトカム発生のリスク比を算出した。

【結果】

4 年間の追跡期間中、ウェルビーイング低下は、主観的幸福感で 109 名（10.6%）、主観的健康感で 189 名（20.1%）、抑うつ傾向（65 歳以上のみ）で 79 名（16.8%）に認めた。

分析の結果、近所づきあいの人数が地域レベル、個人レベルともに主観的幸福感の低下と関連していた。調整済みリスク比（95% 信頼区間）は、地域レベルで近所づきあいの人数が少ない地域に居住する者で 1.63（1.20-2.22）、個人レベルで近所づきあいの人数が 5 人未満の者で 1.51（1.05-2.17）であった。地縁活動への参加は、地域レベル、個人レベルともに主観的幸福感低下との間に明らかな関連を認めなかった。

主観的健康感および抑うつ傾向の変化については、いずれも構造的 SC との間に関連を認めなかった。

【考察】

近所づきあいの人数が個人・地域レベルともに主観的幸福感と関連することが示唆された。これまで近所づきあいの人数とウェルビーイングの関連を縦断的に検討した先行研究はみられず、これは本研究による新知見である。小海町は地縁活動が盛んな地域である。そうした地域では、伝統的な社会的繋がりは義務的となり、より個人的側面の強い近所づきあいが好まれる可能性が考えられた。主観的幸福感のみで関連がみられた理由に、1. 主観的健康感には SC の認知的な側面の影響が強い可能性があること、2. 追跡期間が約 4 年と比較的短かったこと、3. 抑うつ傾向については分析対象数が少なかったことが挙げられる。

本研究の強みとして、1. マルチレベル縦断解析を行ったこと、2. 既存の SC 研究の多くが高齢者に限定した分析をしていることに対し、中年者を含めて解析したこと、3. より信頼性の高い本人回答のみに限定し、純粋な主観的ウェルビーイングを測定したことが挙げられる。一方、主観的幸福感が単一質問で測定されたことや、追跡調査時の無回答者による選択バイアスの可能性を排除できないことが限界である。また、調査は中山間地域で行われており、都市部で同様の結果が得られるかについては、別途、検討を要する。

【結論】

個人の近所づきあいの人数が少ないこと、および、近所づきあいが少ない地域に居住していることが主観的幸福感の低下と関連していることが示された。既存の地縁活動によらず近隣同士の結びつきを促進する取り組みが、住民のウェルビーイング向上に繋がる可能性が考えられた。

1. 学位審査の要旨および担当者

学位番号甲第 704 号	氏 名	能 城 一 矢
学位審査担当者	主 査	村 上 義 孝
	副 査	根 本 隆 洋
	副 査	長 谷 川 友 紀
	副 査	船 戸 弘 正
	副 査	海 老 原 覚

学位論文の審査結果の要旨：

近年ソーシャルキャピタル（人と人との繋がり）と、健康を構成する身体的・精神的・社会的ウェルビーイングとの関連が注目されている。ソーシャルキャピタルの構造的な側面（地域ネットワーク、社会参加等）は介入が比較的容易と思われる。そこで本研究は、構造的ソーシャルキャピタルと主観的ウェルビーイングとの関連を検討した。対象は長野県小海町の40歳以上の住民で回答の得られた2,105人（回収率67.6%）である。ウェルビーイング（主観的幸福感、主観的健康感および抑うつ傾向）は質問項目の回答から評価した。構造的ソーシャルキャピタルとして地縁活動への参加、および近所づきあいを用いた。婚姻状態・同居人の有無・教育歴・重篤疾患通院の有無・飲酒・喫煙を調整し、居住地区を考慮したマルチレベル修正ポアソン分析で解析した。分析の結果、近所づきあいの人数が地域・個人レベルともに主観的幸福感の低下と関連しており、調整済みリスク比（95%信頼区間）は、地域レベルで近所づきあいの人数が少ない地域に居住する者で1.63（1.20-2.22）、個人レベルで近所づきあいの人数が5人未満の者で1.51（1.05-2.17）であった。地縁活動への参加は、地域・個人レベルともに主観的幸福感低下と明らかな関連を認めなかった。なお主観的健康感、抑うつ傾向の変化については構造的SCとの間に有意な関連を認めなかった。本論の結論として、個人の近所づきあいの人数が少ないこと、および、近所づきあいが少ない地域に居住していることが主観的幸福感の低下と関連していることが示された。

2021年11月24日に開催された学位審査会において、研究に関する内容のプレゼンテーションをした後、活発な質疑応答がなされた。なぜ40歳以上の成人に限定したのか、修正ポアソン回帰を使用した理由、個人・地域の経済状態のウェルビーイングへの影響、本結果の都市部への一般化可能性、地縁活動と近所づきあいとの相関をどう考えるか、論文中に記載されたRobustの意味、年齢別検討は行ったのか、地域の定義とその意義、有意差がない結果でも意義があること、など多岐にわたる質問がなされた。それらすべての質問事項に対して申請者は誠実かつ適切に回答した。以上より本論文は、構造的ソーシャルキャピタルと主観的ウェルビーイングとの関連を検討した優れた論文であり、その科学的意義および公衆衛生実践への貢献が高く、学位に値するとの結論に達し、学位審査会を終了した。